

公立中高一貫校入選(入試)概況

◎ 公立中高一貫校では、正式には入試とは呼ばず、行政に合わせて「入学者選抜(略して入選)」という用語を使用しています。

◆ 東京都

東京都の公立中高一貫校は11校で、11校合計の応募者数は、難化による敬遠で2017年、2018年と減少、一昨年は9,156名とやや増加したものの、昨年、今年と再び減少し、8,215名になりました。特に今年の減少は安全志向が影響しています。

東京都教育委員会は、一貫校で高校募集を行っている白鷗高附属、両国高附属、大泉高附属、富士高附属、武蔵高附属について、2021年度から段階的に高校募集停止・完全一貫化と中学段階での定員を拡大する方針で、今年は富士高附属と武蔵高附属の募集定員が拡大されています。

まず区立の九段中等から。同校は応募枠が区分A(千代田区民枠)と区分B(千代田区民外枠)に分かれています。区分Aは一昨年が男子の応募者が増加して女子は前年並み、昨年は逆に女子が増加して男子が前年並みでしたが、今年は男女とも減っています。区分Bは、一昨年が男女とも減っていて、昨年は男子が前年並み、女子がやや減でしたが、こちらも今年は男女とも減っています。区分Bは高倍率ですから、少し敬遠されているのかもしれませんが。区分Aの女子は昨年並みの難度ですが、男子はやや入りやすくなったかもしれません。区分Bはもともと高倍率ですから、少し応募者が減っても難度に変化はなさそうです。

続いて23区の都立です。白鷗高附属は帰国・外国人枠、伝統文化の特別枠、一般枠の3本立てです。帰国・外国人枠は、今年は男女とも昨年並みの応募者数でした。伝統文化の特別枠は男女とも減少しています。どちらも性格上、難度のコメントは控えます。この記事の最後に内訳を載せました。一般枠は一昨年、昨年と男女とも応募者が少し減っていましたが、今年はまとめて減っています。男女とも実質倍率は緩和しましたが、この程度の緩和だと入りやすくなったとは言えません。小石川中等の特別枠は男子が1名増加、女子

は2名減っていますが、小規模な選抜ですから難度のコメントは控えます。一般枠は、一昨年は男子の応募者がやや減って、女子は少し増えましたが、昨年、今年と男女とも減っています。安全志向を反映しての結果です。同校も実質倍率は緩和しましたが、まだ高倍率校ですから入りやすくなったとは言えません。

両国高附属は、一昨年は男子の応募者が増加、女子は前年並み、昨年は男子が若干減って女子は増加、今年は男子がやや増えて女子は少し減りました。増減の幅が小さく、難度面では男女とも昨年並みでしょう。桜修館は一昨年、男子の応募者数が前年並み、女子は少し増加、昨年は男子が一昨年並み、女子はやや減っていました。今年は男子が増えて女子は昨年並み、厳密には微増です。男子は安定基調から増加に変化しています。難度面では、男子はやや難化したかもしれません。女子は昨年並みでしょう。

大泉高附属は一昨年、男女とも応募者が少し減っていて、昨年は男子が減少、女子は若干増加しました。今年は男子が増加、女子は減っています。男子はやや難化したかもしれません。女子の実質倍率は少し緩和していますが、入りやすくなるほどではありません。富士高附属は募集定員を拡大しています。一昨年は男子の応募者が前年並み、女子はやや減っていて、昨年は男子が増加、女子も若干増えました。今年は男女とも減っています。コロナ禍で定員拡大が受験生に浸透しなかったようです。定員拡大もあって男女とも実質倍率は緩和、男子は3倍を切りました。男女とも難度は緩和しています。

多摩地区も見てみます。三鷹中等は、一昨年は男子の応募者数が前年並み、女子は大幅に増加、昨年と今年も男女とも減少していますが、男子は小幅な減少が続いています。女子は一昨年の高倍率への敬遠傾向がまだ止まっていません。男女とも実質倍率は緩和していますが、男子は小幅ですから難度はあまり変わって

いないでしょう。女子は緩和してもまだ倍率の水準は高く、あまり難度は変わっていないようです。武蔵高附属は定員が拡大されています。一昨年、男子の応募者数は前年並み、女子は増加、昨年は男子が目立って減少、女子も少し減りました。今年は定員拡大に対する期待もあって男子は増加、女子は安全志向なのか減りました。男子の実質倍率は定員拡大の効果でやや下がっていますが、難度に変化は見られません。女子は3倍を切り、入りやすくなっています。

立川国際は帰国・外国人枠と一般枠の2本立てです。帰国・外国人枠の応募者数は一昨年在りやや減っていて、昨年は小幅ですが増加、今年は再びやや減っています。男女別では男子が減って女子は増えました。性格上、難度のコメントは控えます。一般枠は、一昨年の女子が前年並み、男子はやや減っていて、昨年は男子が一昨年並み、女子は増加しました。今年は男子がやや増加、女子は減っています。女子は昨年の高倍率の反動でしょう。男子は少し難化したかもしれませんが、女子は実質倍率が緩和しましたが、入りやすくなったというほどではありません。南多摩中等の応募者数は、一昨年在り男女とも増加していましたが、男子は小幅に留まっています、昨年と今年は男女とも減少が続きまし。男女とも実質倍率は緩和しましたが、もともと高倍率ですから、緩和してもあまり入りやすくなってはいないようです。

ところで、毎年合格者の中で入学を辞退するケースがありますが、今年の都立各校では小石川中等の男子が16名辞退しました。女子も7名辞退していて、他に桜修館の女子が6名、武蔵高附属の男子7名、女子6名も目立ちます。他校でも男女別で1~4名の辞退者が出ています。いずれも難関私立の併願者です。

◆ 神奈川県・千葉県

神奈川県には5校の公立一貫校があり、合計の応募者数は3,972名で昨年の3,799名から少し増えています。県立の相模原中等は一昨年、男女とも応募者数は前年並み、昨年は男女とも減っていて、今年は男子が昨年並み、女子はやや減っています。男子の難度は変わっていませんが、女子も実質倍率が少し緩和したとはいえ、高倍率ですから難度に変化はなさそうです。平塚中等の応募者数は、一昨年まで女子が小幅ですが増加が続いていて、昨年は一昨年並み、今年は増えま

した。男子は、一昨年は少し減りましたが、昨年は少し増加、今年はまとまった増加です。実質倍率はアップ、男女とも少し難化したようです。相模原中等、平塚中等の県立2校は、今年は新型コロナウイルス感染拡大防止からグループワークを取りやめましたが、応募状況への影響は軽微でした。

サイエンスフロンティア高附属は、一昨年は男女とも応募者が少し減って、昨年は男子はやや減、女子もわずかですが減りましたが、今年は男女とも増加に転じました。実質倍率はアップ、少し難化しています。横浜市立南高附属は、一昨年は男子の応募者数が前年並み、女子は少し減っていて、昨年は男子がやや減少、女子は少し増えました。今年は同校も男女とも増えています。やはり実質倍率はアップ、男女とも少し難化しています。同校は学区外として横浜市民以外の神奈川県民枠を設けていて、合格者の30%以内ですが、今年は15名合格と9%でした。昨年より減っています。

市立川崎の高校は全日制普通科の他に専門学科や昼間定時制課程がありますが、今年から中学が接続する全日制普通科の高校募集が廃止され、完全一貫の体制になりました。男女別の内訳は非公表です。一昨年、昨年と応募者は少し減っていましたが、今年は昨年並み、厳密には微減でした。難度面は昨年とあまり変わっていないようです。

続いて千葉県です。県内公立一貫校3校の合計の応募者数は、昨年は一昨年より若干増えましたが、今年は減っていて、3校とも女子の減少が目立ちます。県立千葉の男子の応募者数は、一昨年まで少しずつ減って、昨年は一昨年並みでしたが、今年も減りました。女子は、一昨年在り減少、昨年は増加、今年は減少と隔年的な変化ですが、今年の減少幅は大きくなっています。毎年高倍率の厳しい選抜が続いていましたが、今年は安全志向が強く、出願を見送った受検生が増えたようです。二段階選抜で、1次は少し入りやすくなったかもしれませんが、2次は昨年並みの難度でしょう。県立東葛飾は、一昨年は応募者が増加、昨年は男女とも少し減っていて、今年は男子が昨年並み(厳密には微減)、女子は少し減っています。女子は安全志向が強いようです。ただ、難度面は1・2次とも入りやすくなるほどではなかったようです。

市立稲毛は、一昨年は男子の応募者が増加、女子は前年並み、昨年は男子が一昨年並み、女子は増えてい

ましたが、今年は男子がやや増加、女子はかなり減りました。男子は隔年現象ですが、女子は安全志向から高倍率校を避ける動きがあったようです。同校は県立の2校と違って二段階選抜ではなく、1回の選抜で合否が決まります。男子は昨年並みの難度、女子は少し入りやすくなったようです。なお、同校は2022年度入学生から高校募集がない完全中高一貫校に移行しますので、人気も変化していくでしょう。

◆ 埼玉県・栃木県

埼玉県では川口市立が新設開校で、応募者数は581名でした。2018年の市立大宮国際中等の開校時は1,000名を超えていましたから少なく見えますが、募集規模が半分ですから、十分高い人気です。コロナ禍で受験生への浸透が心配されましたが、大丈夫でした。県内他校と同様の二段階選抜で、1次は男女とも約3倍、2次は2倍を超えました。難度は大手公開模試の集計を待たなければなりません、市立浦和に近い水準だったかもしれません。同校の開校もあって、県内公立一貫校応募者数合計は大きく増えています。

市立大宮国際中等は男女とも応募者が減っています。開校人気が一段落してきました。難度面では二段階選抜の1次が男女とも少し入りやすくなったようです。2次は昨年並みでしょう。市立浦和は、昨年女子の応募者が減り、男子もやや減っていましたが、今年は男子が減って、女子は昨年並み(厳密には微減)でした。市立大宮国際中等と1次が併願できることから、市立大宮国際中等の人気の落ち着きに歩調を合わせた動きです。1次は男女ともやや難度が緩和したかもしれません。2次は昨年並みでしょう。

県立の伊奈学園は、昨年は応募者が増えていましたが、今回から作文(といっても実質的には適性検査)に英語を導入すると予告されていて、その影響が注目されていました。応募者数は厳密には微減ですが、昨年並みといってよい人数で、影響はあまり見られません。実際の出題では、リスニングのみで、その内容について解答するものでした。難度面は昨年とあまり変わっていないようです。

続いて栃木県です。宇都宮東高附属は、男子の応募者が減り、女子は少し増えました。国立の宇都宮大附属と併せて検討している受検生が多く、宇都宮大附属は男子が増加、女子は減っているため、両校を合わせ

れば人気に変化がないと言えそうです。男子はやや入りやすくなったようですが、女子の難度はあまり変わらなかったようです。佐野高附属は、昨年は男子の応募者が増加、女子は一昨年並みでしたが、今年は男女とも減っていて、女子の減少が大きくなっています。昨年までの3年間、応募者が増加傾向で難化が進んでいましたが、今年から高校募集の方式が変更になったこと(独自問題の特色選抜のみの実施から、通常の募集も実施することに変更)から、無理に中学段階で入学しなくても、といったムードが生まれているのかもしれませんが。矢板東高附属は、一昨年、昨年と男女とも応募者が少しずつ減っていて、今年も男子はやや減少ですが、女子はまとまって減りました。同校も高校募集が佐野高附属と同様に変更された影響が、地域の児童数の減少に重なっての応募者減でしょう。男女とも1倍台で、少し入りやすくなったようです。この結果、県全体の応募者数も減少が目立ちました。

◆ 茨城県

茨城県では公立高校再編の一環で、2020年度~2022年度で10校の公立一貫校を新設、従来からの3校と合わせて13校と、東京都を抜いて全国トップの学校数になります。昨年は5校、今年は3校開校で、2022年度は2校が予定されています。こうした施策で県全体の公立一貫校応募者数は、昨年に続いて今年も大きく増えました。まず新設校から見ていきます。

水戸第一と土浦第一は県内公立進学校の双璧です。改めての説明は必要ないでしょう。この両校に附属中が新設されました。水戸第一高附属は362名の応募者数で、男女とも4倍を超えました。倍率から考えると並木中等と同等か、やや高い難度だったかもしれません。水戸周辺は中学受験が小規模ですが、これをきっかけに拡大するでしょう。土浦第一高附属は、並木中等や昨年開校の竜ヶ崎第一高附属と通学エリアが重なり、私立の江戸川学園取手や茗溪学園などもありますから、水戸周辺よりは中学受験が広がっています。応募者数は263名で男女とも3倍台でした。水戸第一高附属と差がつかいましたが、並木中等や私立各校など、他校の選択肢が多いためでしょう。並木中等よりも少し入りやすかったかもしれません。

勝田中等は、水戸第一高附属や土浦第一高附属とは違って、高校募集を行わない完全一貫校です。立地面

では水戸の郊外にあたります。181名が応募、男女とも2倍に達しませんでした。母体になった勝田高校も、大学進学実績が悪いわけではないのですが、やはり水戸第一のネームバリューに押されたようです。倍率から考えると、それほど難度は高くなかったようです。

既存校も見てみます。日立第一高附属は応募者が減りました。昨年は増えていましたから隔年的な変化ですが、特に男子は水戸第一高附属に流れた受験生も見られました。難度面では少し入りやすくなったようです。昨年開校した太田第一高附属は、昨年は定員ギリギリの応募者数で、欠席もいましたから不合格者は出ていませんでした。中学受験が珍しい地域で、中高一貫校を選ぶなら日立第一高附属や私立の茨城キリスト教学園を選んだり、水戸の茨城を選ぶケースも見られる地域で、受験生への浸透が不十分でしたが、2年目の今年は応募者が増えました。特に女子の増加が目立ちます。今年是不合格者も出て、昨年より確実に難化しています。

東部の鹿島高附属と鉾田第一高附属は両校とも昨年開校です。両校とも応募者は増えていて、特に鹿島高附属の男子の増加が目立ちます。公立一貫校は開校2年目に応募者が減るケースが多く、「2年目のジンクス」などと言われます。開校初年度は難度の目安がなく、準備不足のまま挑戦する受験生が見られ、翌年になると難度が知れ渡り、こうした受験生が減るからですが、この両校については当てはまらず、地域に中高一貫教育が広がっています。鹿島高附属は難化、鉾田第一高附属も少し難化したようです。

県南の並木中等は、男子の応募者が増加、女子は少し減りました。昨年は竜ヶ崎第一高附属が、今年は土浦第一高附属が開校して、地域の一貫校の選択肢が広がっています。土浦第一高附属に受検生が流れるのでは、という事前予測がありましたが、男子はそんなこととはなく、女子もあまり目立つ流れはなかったようです。県内公立一貫校第一号で、進学実績も高いことか

ら信頼されているのでしょう。もともと隔年現象が見られることもあって、男女とも難度はあまり変わっていないようです。昨年開校の竜ヶ崎第一高附属は、男子の応募者が少し減りました。女子は昨年並みです。高校は文部科学省指定のスーパー・サイエンス・ハイスクールですから、こうした特色があって、受検生が土浦第一高附属にあまり流れなかったのでしょう。男子は4倍、女子は5倍を超える実質倍率ですから、昨年並みの難度が続いています。

西部の古河中等は、一昨年、昨年と応募者が少しずつ増えていましたが、今年は男子が減少、女子もやや減りました。地域的に新設開校の水戸第一高附属、土浦第一高附属、勝田中等の影響はほとんどなく、むしろ埼玉県の中予受験の影響を受けます。埼玉県では、東京などからの前哨戦受験生が減るのではという事前予測がありましたから、埼玉県の私立に流れたのかもかもしれません。男子はやや入りやすくなった可能性があります。女子の難度はあまり変わらないでしょう。昨年開校の下館第一高附属は、男子の応募者がやや減り、女子は昨年並み、厳密には若干の増加でした。地域に中高一貫教育で根を張ったようです。難度面は昨年並みでしょう。

なお、2022年度は下妻第一高校と水海道第一高校に附属中が開校する予定です。

◆ 寮制校の東京入試

公立中高一貫校でも寮制入試を行う学校があります。鹿児島県立楠隼(なんしゅん)中学校で、全寮制公立中高一貫男子校です。東京会場だけの応募者数は未公表ですが、県外各会場合計の応募者数は少し減っています。やや入りやすくなったかもしれません。

☆ 都立白鷗高附属の特別枠の内訳

分野	募集定員	応募者数		受検者数		合格者数	
		男	女	男	女	男	女
囲碁・将棋	6名程度	3	0	3	0	0	0
邦楽		0	1	0	1	0	0
邦舞・演劇		1	1	1	1	0	1